
coffee holick

八月一日

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c o f f e e h o l i c k

【Nコード】

N 3 4 0 1 P

【作者名】

八月一日

【あらすじ】

私には無口な姉がいる。そんな姉が自主的に話すことがある。

「……コーヒーがない」

「……」
「……」

私には無口な姉、坂神梨亜さかがみりあがいる。本当に喋らない。授業であてられようが何をされようが喋らない。喋らないから絡んでこようものなら、男子は頬肉がはじけ飛んだんじゃないかってくらいいい音のするビンタ、女子には頭突き。でもそんな姉でも自主的に喋るときがある。

「……コーヒーがない」

コーヒーが切れた時だけ自主的に喋る。中毒じゃないかってくらいにブラックコーヒーを飲むから、すぐになくなるけどまとめ買いしてるから常にストックはある。けれど、そのストックが切れたよ
うで。

「愛美あみ、コーヒーがない」

「買ってくれば？」

「……コーヒーがない」

「いや、だから買ってくれば？」

ソファでぐったりしていたら、姉が間近までせまってきてた。

「コーヒーが……ない」

このやりとりのたびにこの展開。ソファに仰向けでぐったりしていたら、馬乗りされて美人顔の姉が鼻先すれすれの近さで無言のプ

レッシュァー。初めてこの状況に追い込まれた時はかなり焦ったな！。
美人の顔が間近だもん。

「……………」

「……………」

無言で返して見るも、状況かわらず。

「ちょっと、近いつて毎回言ってる——」

すうと耳元に顔を近づけてきた姉は、

「コーヒーがない……………」

耳にあたる息がくすぐつたくて顔をそむけても、姉は執拗なまでに耳元でささやいてくる。

「コーヒーがない」

「自分でっ買いに行けばいいでしょ？」

「……………愛美の胸、大きいからもみごたえありそうね」

体をおこした姉は、ごく自然な流れで私の胸の上手を乗せてきた。

「……………コーヒー」

「だから自分でっ!？」

ここまで来たら最後まで反抗してやろうと思ったら、姉は思いのほか本気だったらしく手加減なしに揉みだした。

「ちょ、なんで揉んでくるのっ!」

「コーヒー」

「意味が分かんないからそれっ!!」

姉は妙な力加減をつけながら揉んでくる。馬乗りだから逃げられないっ!

「……思いのほか癖になりそう」

「何さらつと変なこと言ってるのよっ」

とはいえ目がマジだ。というか姉は一旦癖になると飽きるまでそれを繰り返す。

「ねえ、直接」

「だめに決まってんでしょうがっ! 何考えてんの!」

「……コーヒー」

あーもう、コーヒーくらい自分で買ってきて来いっての。

「……脱がすの簡単そうな服ね」

マッサージのように一定のリズムで揉んできていた手が止まった。脱がすのが簡単そう?

「ちょ、何考えてんの?」

「コーヒー……それとも直接?」

なんて卑劣なっ! ……とは言ってもどっちかを選ばないと確実に脱がしにかかってくるだろうし。というか選択肢一個しかないじ

やん。

「あーもう、いけばいいんでしょ行けば」

「よろしい」

胸の上から手がどいて、馬乗りになっていた姉もどいた。しかもすごい満足げな顔。

・°・∴°・*°・∴∴*・°・*∴°・*°・∴
・°・∴°・*°・∴∴*・°・*∴°・*°・∴
・

「ふふ」

「はあ、ねえ。いつまで抱きついてる気？」

コーヒーを買いに行つて帰ってきた後、私の手からコーヒーの瓶が数本入った袋をかすめ取つてキッチンに消えた姉は、アイスコーヒーを手にソファに座ると、それを満足げに飲んだ。私は、ソファにうなだれるように座つてこのまま寝ようかどうか考えていたら、姉に抱き寄せられてそのまま今に至る。というか長い。いつまで抱きついてるきなんだろう。

「んー？ 私の気が済むまで」

はあ、今の姿を学校でさらしてやりたい。無口で何も喋らない姉が普段はこんなだと知れば、それなりの話題性になるだろうし。というか今日はよく喋る。何日分喋る気だろう。

「それっていつ」

「さあ」

さあって、もう30分は経ってるけど？

「寝ちやうの？」

「その方が楽」

もともと寝るかどうか悩んでたんだから、そのまま寝てしまえばいい。寝た後の扱いが気になるけど。目を閉じて、寝入る準備に入ると、

「おやすみ」

なんともまあ、能天気な姉の声。

……久しぶりに長々と話したかな、姉とは。

[illegible]

6

『おはよう』

「は？」

寝起き早々に見たのは、携帯の画面に映し出された文字。

「……声でないとかなわないでしょうね」

「枯れたちやつた。てへ」

普段喋らないのにあんなに喋るから喉をやったらしい。なんともまあ、姉らしいような。

☞ コーヒー飲む？ ☞

「ん」

中毒のように飲んでるだけなことはあって、姉の入れるコーヒーは結構おいしい。

そう思うとコーヒー中毒の姉の我儘もまあ、聞きいれてもいいよ
うな気もする。

（後書き）

はい。問題用紙裏シリーズ（そんなもんじゃないです）です。

渋いというか苦味？ とにかくそういうの好きですね。はい。コー

ヒーは中毒的に飲みますね。ブラックを。さすがに梨垂ほどの中毒じゃないですけど（、、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3401p/>

coffee holick

2010年12月6日07時41分発行